

安全運転

ほんとNEWS

2018年5月号

今月のクイズ

国は2020年までに、国内乗用車メーカーにおける自動ブレーキの新車搭載率の目標を設定しました。その目標の新車搭載率を次の中から選んでください。（答えは裏面）

- ① 6割以上
- ② 9割以上
- ③ すべての新車

自動ブレーキを過信しない！

自動ブレーキ（衝突被害軽減ブレーキ）搭載の新車が多くなりましたが、皆さんは自動ブレーキを「非常時に自動で車を停止させ、事故を未然に防ぐシステムだ」と思っていますか？

今月は、「自動ブレーキ搭載車の事故は減っているのか？」「非常時にシステムが機能するのか？」をテーマに、自動ブレーキが作動する条件をみてみましょう。

自動ブレーキは事故を減らすが、万能なシステムではない

自動ブレーキを搭載していないトラックと、搭載しているトラックに分け、追突事故の発生率を比較したものをみると、約3分の1に減っており、事故削減の効果があることがわかります（図1）。

一方、国民生活センターには2012年度以降、先進安全装置※に関する相談（142件）が寄せられ、そのうち自動ブレーキに関する相談（119件）が8割を超えていました（図2）。内容をみると「自動ブレーキが作動しないことがあるのを知らずに追突事故を起こした」「進行方向左手の電柱に自動ブレーキのセンサーが反応して急停止した」など、ドライバーの想定を超えた事象による相談が寄せられています。

同センターのアンケート調査では、先進安全装置の搭載車を運転中に、損害の有無にかかわらず想定外の出来事を「経験したことがある」と答えた人のうち、自動ブレーキが「予期せず作動した」との回答が約15%、「利かなかった」が約4%を占めていました。

また、車の販売店は先進安全装置についての説明を行ってから車を引き渡していますが、アンケートの「運転する際の注意事項の理解」について、17%の人が「聞いたことはあるが理解していない」「理解していない」と回答しています（図3）。

自動ブレーキは、予期せず作動したり、そもそも作動しなかったりするなど、システムは万能ではなく限界があります。ドライバーは自動ブレーキ搭載車を運転する前に、システムが作動する条件を十分に理解する必要があります。

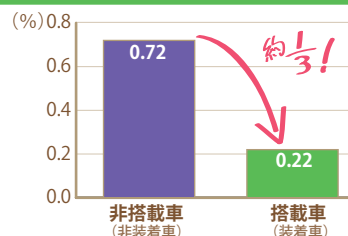


図1：自動ブレーキを搭載したトラックと非搭載のトラックの追突事故発生率の比較（2015年4月～2015年12月）

出典：国土交通省 中部運輸局 平成28年2月「衝突被害軽減ブレーキ装着車の追突事故発生率が1/3！」より弊社作成

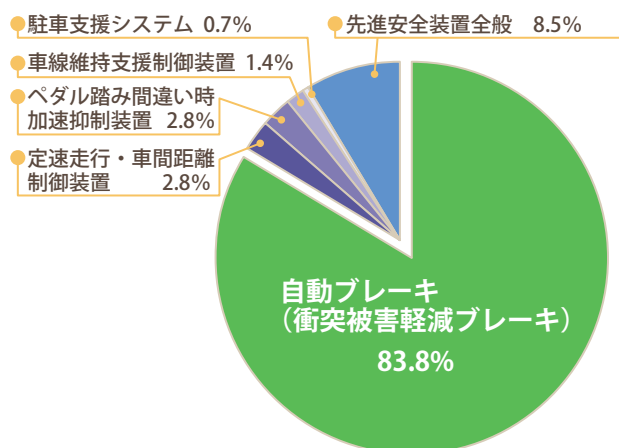


図2：国民生活センターに寄せられた先進安全装置ごとの相談件数の割合

出典：独立行政法人国民生活センター 平成30年1月「先進安全自動車に関する消費者の使用実態」より弊社作成

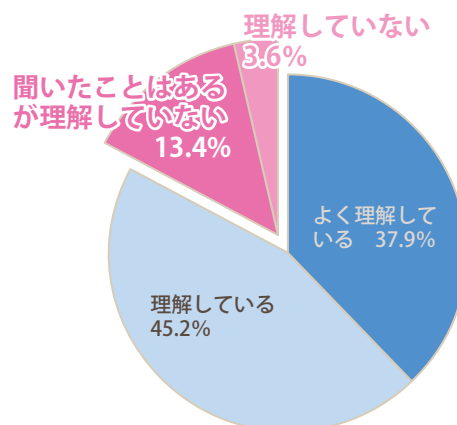


図3：先進安全装置を搭載した車を運転する際の注意事項の理解度（アンケート調査）

※自動ブレーキ（衝突被害軽減ブレーキ）、ペダル踏み間違い時加速抑制装置、定速走行・車間距離制御装置（アダプティブクルーズコントロール）、車線維持支援制御装置（レーンキープアシスト）、駐車支援システムの5つを対象としています。

自動ブレーキ搭載車は「事故を未然に防ぐ」とは限りません



自動ブレーキとは、下図のような段階で事故回避を促したり衝突被害を軽減させたりするシステムのことをいい、「事故を未然に防いでくれる」とは限りません。では、自動ブレーキが作動する流れをみてみましょう。



自動ブレーキは「危険時に必ず作動する」と過信してはいけません



自動ブレーキを作動させるカメラやレーダーなどのセンサーは万能ではありません。カメラは人間の眼と同じで、視界が悪いと危険を検知しづらくなります。レーダーも悪天候のときは作動しないことがあります。一方、ごくまれに予期しないものを検知し、衝突の危険性がなくてもシステムが作動することがあります。自動ブレーキのシステムを過信せず、常に安全運転を心がけましょう。

また、自動ブレーキは車種ごとにシステムやセンサーの性能に違いがあるので、検知できる種類や範囲などが異なります。車を購入したときは販売店の説明を聞き、取扱説明書をよく読んで、自動ブレーキのシステムを十分に理解しましょう。では、「センサーが検知できない」または「危険性がなくても検知してしまう可能性」がある対象や状況の一例をみてみましょう。

検知しない、検知できないおそれがある対象

- ・身長1m未満の子どもや動物
- ・暗い場所にいる歩行者
- ・前方を走る自転車やバイク
- ・急に飛び出してきた歩行者
- ・前方を横切る車や自転車
- ・横から急に割り込んできた車など



車や歩行者を検知できないおそれがある状況

- ・悪天候で視界が悪いとき
- ・フロントガラスの汚れなどで、カメラの視界が遮られているとき
- ・カメラが太陽などの強い光を受けたり、トンネルの出入口など、明るさが変化したりしているとき
- ・カーブや路面の凹凸などで、センサーが前方を確認しにくいときなど



衝突の危険性がなくてもシステムが検知してしまう可能性がある状況

- ・カーブの入口や上り坂の上にある電柱や道路標識
- ・カーブや右左折時にすれ違う対向車
- ・センサーの向きがずれているとき
- ・濃い霧や煙の中を通過するとき
- ・天井の低い立体交差や狭いトンネルを通過するときなど



日ごろの点検整備を怠ってはいけません

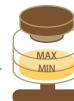


タイヤが摩耗していると、自動ブレーキのシステムが正常に作動しても、ブレーキが利き始めてから車が止まるまでの距離が長くなるため、重大事故を避けられない状況が生じます。また、ブレーキオイルが足りないと、システムが作動してもブレーキが利かないおそれがあります。日ごろから、車の点検整備を行いましょう。



- ・溝が減っていないか
- ・亀裂がないか
- ・たわみがないか

- ・ブレーキオイルが減っていないか
- ・劣化していないか



自動ブレーキは万能ではありません。ドライバーは、

- ① 自動ブレーキ搭載車を運転する前に、システムが作動する条件を十分に理解し、
- ② 運転するときはシステムを過信せず、安全運転を心がけ、
- ③ 正常にブレーキが利くように、日ごろの点検整備も行いましょう。

今月のクイズの答え

② 9割以上（出典：国土交通省 平成29年3月『安全運転サポート車』の普及啓発に関する関係省庁副大臣等会議 中間取りまとめより）